

第三十七話

寺宝の茶碗

明治23年3月31日は、朝から強い雨が降り続いておりました。横松や萩の人々は、皆ひっそりと家の中に閉じこもっていましたが、それは、雨のせいばかりではありません。東阿久比村の村長から、今日は一日中外へ出ないようにといいお触れが出ていたからです。

しかし、締め切った家の中へは、板びさしを打つ雨音と共に、東や北の方角から、大勢の人々の走り回る足音や、鋭い金具の響き、馬のいななき、重い車輪の音にはじけるような鉄砲の音が混じって聞こえてきました。「お父ととつつあん。戦いくさが始まったよ。わし、見に行きたいなあ。」

「こらっ、じつとしとれ。先生さまに出るなと言われとるだろうが。」

「うん、見回りをするからなと言った。」

「それみろ。今日はおとなしく、ワラないでも手伝つとれ。」

そのころ、横松の清光寺せいこうじへ、隣接乙川村の新美徳三郎にいみとくさぶろうさんが駆け込んできました。

「へえ、ご免やすな。おっさんはおいでで…。」

「はいはい…。おや徳さんじゃありませんか。このひどい雨降りの中を、そんなにまあ息せき切つて…。どうしやしたな。」

「へえ、今日は外へ出るなというお達しで、家にもつていましたところ、将校さんがおいでで、お宮へ見えるお方にお茶をさし上げてくれると言われるもんだから、家の欠け茶碗じゃあ、いくらなんでもまずいと思っただ、すぐ持つてめえりますと言つといて、借りに飛んできました。」

「ああ、そうかそうか。それじゃあな、この湯呑と、それから土瓶にお茶を入れて……、このお盆で持ってお行き。」

「へえ、どうもありがとうございます。すぐお返しにきますから。」

徳さんは、また、急いで帰ってまいりました。

白山社へ行ってみると、雨に漏れた外套のままお社の縁に腰掛けた、立派な髭を生やした人を取り囲むようにして、数人の将校たちが膝をついていましたが、その端の二人が徳さんの姿を見つけると、すぐ立ち上がって足早にやってくる、一人がお盆を受取っていき、もう一人は、さりげなく警戒するように徳さんの前に立ちはだかっていました。

「お上、どうぞお召しあがりを……。」

「うむ……。」

その人は、おいしそうにお茶を飲んでおりました。

「あの……。」

「なんだ。」

「あのお方は……。」

「これっ、粗相があつてはならぬぞ。天子様であらせられる。」



「ひえーっ。」

徳さんはガタガタ震えながら、濡れた地面に土下座してしまいました。

まだ震えの止まらない徳さんから話を聞いた清光寺の和尚さんは、その茶道具を寺の宝として大切に保存することにしました。

陸海軍大演習



— 清光寺山門 —

乙川―半田での陸戦を乗馬で督戦された。乙川の若宮から東長根を通り、当町萩の上ノ割でしばらく観戦後、上半田へ移動、午後二時、半田駅から名古屋の大本営へ帰られ、翌4月1日からは三河での大演習に臨まれた。明治政府は、その前年に国民皆兵制を確立し、軍備を増強すると共に、こころした陸海軍大演習を実施し、臨戦体制を急ぐ。日清戦争はその四年後に起きた。

明治天皇は、明治

23年3月29・30日、篠

島沖と武豊海上での

軍艦十一隻による海

戦を統監、半田の小

栗富治邸宅で休泊、

翌31日は早朝から、

第三十八話

福住の豊田佐吉

織機開きの日

「弥吉さん、あんた聞かれたかや、田村とこに入った機械のこと。すごいのが四十台も入ったんだって。」

「ふうん、それで、どこの機械だか分かったのか。」

「それがよう分からん。工場の窓には幕が張つてあるし……。だけど、乙川の石川工場の方がよりすごいんだそうさ。」

「ほお、そいじゃ、きつとドイツ製だ。機械はやっぱしドイツだと言うもんな。」

明治45年のことでした。福住荒古の田村衛治郎さんが織機を全部、最新の力織機に入れ替えたという話は阿久比中の大評判となりました。

豊田佐吉との約束で、田村さんがあれほど秘密にしておいたのに、どこでどう聞きつけたのか、織機開きの日には、宮津や植だけではなく、草木や岡田からも大勢の見物人がおしかけて来ました。

「なあ、弥吉どん。こういう時は宮津では花火をあげるんじゃないかな。」

「そうだよ。旦那衆の所をチョチョと回つてくれば、十発や二十発は、ポンポンだ。荒古じゃ……。」

弥吉と呼ばれた人が、そこまで言った時でした。突然、工場の中でダダダと大きな音がし、それまで人々の視線をさえぎっていた暗幕が取り払われ、ガラス戸まで開け放されました。中には緊張した面持ちの田村さんが立っ

ました。おそらく、今日のための舶来品なのでしょう。足にびったしくついたグレーのパンタロンは、瘦身の田村さんを一層スマートに見せていました。

田村さんが一台一台織機に触れていくと、「シャシャシャ」と規則正しく軽快な織機の合唱が始まりました。

ところがです。しばらくして、パタパタと織機が止まり始めました。田村さんが、最初の織機を再び動かした時には、三台も四台も止まっていました。二台目を動かした時には、半数近くの織機が止まっていました。

それから田村さんの奮闘が始まりました。あちらをかまえばこちらが止まり、こちらを直せば向こうが止まる。次々に止まってしまふ織機の間を走り回る田村さんのパンタロンが、次第に黒く、また黒く油で汚れていき、見物の人も一人、一人、また一人消えていきました。

田村さんが、奥さんの弟、草木の清さん（きよさん）をこっそり使いに出したのは、「やっぱし、日本製はだめだ。」と言って、植の鍛冶屋（かじや）の広（ひろ）さんが立ち去った後の、次の日のお昼近くになつてからでした。

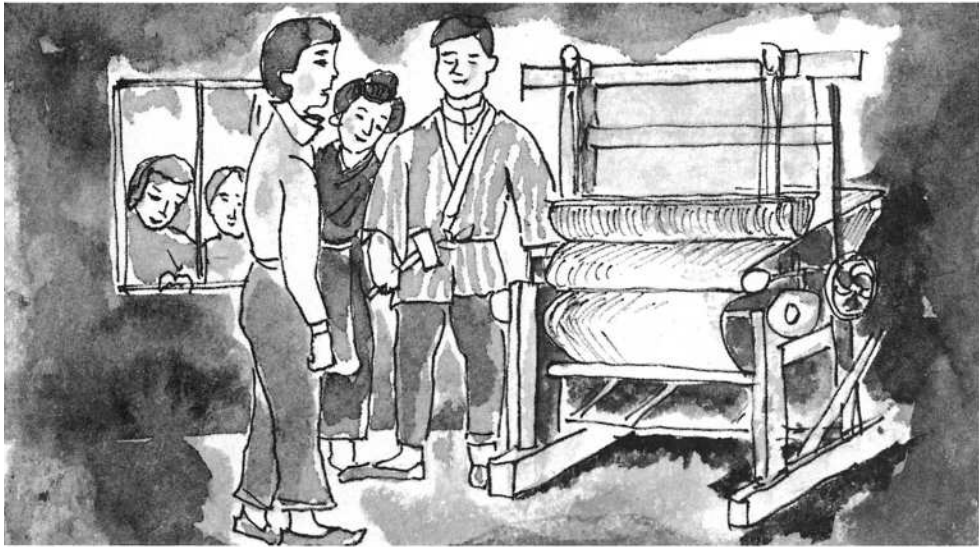
汗 だ く 佐 吉

次の日の朝、清さんから事情を聞いて、亀崎まで武豊線を使い、福住荒古にやってきた豊田佐吉の姿は、尻（しり）ばしよりに股引き（ももひき）をはき、鳥打ちをかむつた、どこから見ても商店の御用さきの姿でした。

「ちつとも、動きゃへんが。」

佐吉の顔を見た田村さんは、思わずむき出しの阿久比弁で叫んでいました。

「どれもこれも、すぐ止まってしまふんです。一人で二十台はいい、女でもかまえるはずだと言われたのに、どうなっているんです、こ



のハタゴは……。」

汗をふきふき、一々うなずきながら聞いていた佐吉の目が「ハタゴ」という言葉が出た時、厚めの目ぶたの奥でキラリと光りました。

真剣な顔つきになった佐吉は、黙って、つうつと工場に入っていました。佐吉は、まだ機に掛かっている綿布を一枚一枚天眼鏡で覗き込み、それが終わると、今度は、一台一台隅から隅まで織機を調べていきました。

どこをどうかまったのか、不思議が起きました。佐吉に糸をつながれ、シャツトルを整えられた織機は、まるで生き返ったように動き始めました。どの織機も、どの織機も、止まることを忘れたように動き続けました。時々止まる織機は必ず縦糸が切れていました。

調子づいてしまった織機は、田村さんがやっても、佐吉にせつかれての奥さんのサクノさんの手にかかっても同じでした。二日目も、三日目も動き続けました。四日目になって、

「止まるところがいいのだ」ということが、

田村さんにもやつと分かりました。

しかし、一日、一日と、佐吉の目が厳しくなっていました。

五日目から、佐吉の夜なべが始まり、九日目には、清さんが、高瀬技師を呼びに、また名古屋まで走らされました。十五日目には、腕を見込まれ、植の鍛冶屋の広さんが呼ばれて来ました。

豊田佐吉が福住荒古をやつと出発できるようになったのは、二十一日目の朝のことでした。佐吉は、来た時とは大違いの一分の隙もない洋服姿で、ステッキまで持っていました。

佐吉は、糸が切れるようになったら植の広さんと呼ぶこと、三、四日は小鈴谷の退三さんの家にいることを告げた後、サクノさんに「一、二、三の四ですよ。」

と言って、ハンドルを引く仕草を示し、人力

車に乗り込みました。

遠ざかって行く人力車を、田村さんは、「ふうん」とうなりながら、サクノさんは「ゲ

グッ」とくる始動の際のハンドルの感じを思い出しながら見送っていました。

昔の織物業

当町のシンボルとしては、まず、おいしい阿久比米と木綿織物業があげられ、町内には現在も、大小多数の織布工場があつて、日夜生産に励んでいる。

三河木綿と知多晒

木綿については、三河の幡豆へ千年以前に伝来という伝承があり、三河地方でまず栽培・織布され、古来、三河木綿として喧伝された。当地は三河との関係が深く、約四百年前にはすでに生産があつたよつであるが、江戸時代天明年間に岡田で木綿晒が開発されるに及んで、その隣接地として、非常に盛んになった。

機織り内職

織布は、秦氏や服部などの帰化人とその子孫の特殊技術であつたが、江戸時代になると、農村女子の内職として発達し、農家は、自身で棉を栽培・収穫し、それを糸に紡ぎ、織るようになった。漂白や染色は、村に一、二軒くらいあつた晒屋・紺屋に依頼した。機織りに熟達した女性は、嫁に

もらい手が多く、大切にされたという。

綿替制

江戸時代末から明治初期になると、仲買人（各地区に一〜二人）や問屋（宮津に二軒）が、綿または糸を農家に渡し工賃を支払うようになった。また、糸に糊つけ等をする玉造屋も現われるようになった。

織布工場の出現

その後、仲買人等の中には、自宅に数台以上の織機を置き、自家や農家の女性に織布させる者が現われ、今日の発展につながっていく。

織機の改善

初めは手足で動かす木製の織機であつたが、工場では明治20年ころ石油発動機を用いる動力織機を採用し、製品の量産化・均質化・省力化に努めた。本話は、大正初期豊田佐吉が栄生に織機工場を造つたころの出来事で、機種は自動織機完成前の赤軽便式と言われるものであつた。

第三十九話

夢のお告げ

紫の雲

大正も末に近いころの、ある朝のことです。まだ雨戸を締めたままの家が多いというのに、高岡の房ふささんは、西の街道沿いでうろうろと何かを捜し求めておりました。

するとそこへ、一人の男がやってきました。房さんの姿をしばらく見ていた男は、ツカツカとそばへやってきます。

「あの、もし、そこのお人……。」

声をかけられて、げげんそくに振り向いた房さんは、その男の次の言葉に、びっくりして飛び上がりました。

「もしや、あんた、白山様はくせんをお捜しと違いますか……。」

「へい、そのとおりですが、あんた、どうしてそれがお分かりで……。」

「わしは、矢口の寅とらというもんですが、ゆんべ不思議な夢を見ました。紫の雲が部屋いっぱいになって、その奥から、

『わしは白山の神じゃ。いま土に埋もれてまことに困っておる。どうか早う掘り出して祀まつってくれ。』

と言われる声が聞こえてきた。そこで目がさめてしまつて、朝までうとうととしておつて、外が少し明るくなつてきたんで、早速ここへやってきたら、お前さまがうろうろしてらっしゃるから、もしやと思つて声をかけましたんじゃ。」

「へええ、なんとまあ、わしが昨晚見た夢とそっくりだな。不思議なことがあるもんですのう、二人とも同じ夢を見るなんて……。」

ま、そうだとすると、神様はどつかに埋ま
とられるに違いない。とにかく二人でお捜し
いたしましょう。」

まもなく房さんと寅さんは、がけ下の溝に
ほとんど埋まってしまっている白山様のご神
体を見つけ、丘の上にお祀りすることができ
ました。

寝た地藏様

矢口の寅さんと高岡の房さんは、白山様
ご縁で、親せきづき合いをするほどの仲よ
になりました。おたがいに農作業の手伝いを
し合うし、旅に出るのもいっしょでした。

ある日のことです。――

房さんが寅さんの家へ飛んできました。

「わし、寝たお地藏様の夢見た……。」

「ああ、わしも夕べ見た。」

天竜川の上流の、とある辻に草に埋もれた寝
姿のお地藏様がおられて、おまえたちの所へ

行きたい、早くつれに来いと言われたのです。
相談のうえ、あくる日の朝早く、二人は家
を旅立ちました。

真夏の未明は、そよ風も心地よく、ひんや
りと甘い空気が満ちておりました。二人が
通っていく川堤への農道の左右には、今年の
豊作を約束するかのように、やや黒味を帯び
た稲の葉先には露の小玉が光り、道端の草も
しつとりと濡れておりました。

ところが、二人が福住を通り、板山を抜け
て、ダラダラと長い坂道へかかったとき、次
第に乳色の朝靄が立ちこめてきました。それ
が、濃くなったり淡くなったりして二人を包
み始めます。

坂の頂上付近に着いたころだったでしょう
か。

なんとなく黙りこくって足を進めていた二
人は、ふと、申し合わせたように歩みを止め、
前方をすかし見ました。濃い靄を押し開くよ



うにして、黒い影がスタスタと上がってくるのです。

「寅さんと房さんかね。」

「へえ、そうですけど……。」

「寝たお地藏様をここまでお送りしてきましたし

た。受け取ってください。」

そう言うと、その黒い影は、寅さんの背にズツシリと重い物を背負わせ、それからスタスタと霧の向こう側へ消えていってしまいました。

二人はぼかんと口を開けたまま、しばらく霧の先をすかしておりました。そして、黙ったまま、引き返しました。

背中のお地藏様は思いのほか軽かったのですが、それでも途中でなん度も交代をしました。

ところが、平泉寺の角^{かど}まで来たとき、房さんの背中のお地藏様が急に重くなって、もう一歩も歩けなくなってしまうのです。背負っていない寅さんまでが歩けなくなったのも不思議でした。——これは、お地藏様は平泉寺へお行きになりたいに違いない——。二人はうなずき合くと、左の道を取り始めておりました。

第四十話

ニンニク 食わんからダメ

「おい、銚けいさあ。この暑いさ中に、よう精が出るのう……。」

「ああ、これも金もうけだで、その日暮らしのわしらじゃ、暑いなのんと言つとれんわ。なあに、昼前の十時までに山砂を七回か八回も運べば、今日はそれでおしまいだあな。この暑さじゃあ、それから後、昼過ぎまで働いたんじゃ、いくらがんじょうなおれでも、目を回してぶつ倒れちゃうわい。それにだいいち、牛が使いものにならなくなってしまうからう。こいつは、えらい働さもんで、ほれ、見てくれ。山盛りのトロッコをいつぺんに三台も引っぱれる。こいつをまいらせちゃうと、

元も子ものうなるでう……。」

昭和5年の夏、知り合いの老人に声をかけられた銚太郎さんは、棕岡の鉄道道路で立ち止まって、語しかけられたをよいしおに、ちよつと息を入れました。汚れたジュバンは、もうベツタリと赤銅色の体に貼りついており、背中に幌はろを着けた黒牛は、鼻の穴を大きく動かせています。

「この村へも、とうとう電車が通ることになった。なにしろ、汽車は東、電車は西で、ここだけ鉄道がねえ。こんなばかなことはねえと言い合つとつたが……、長生きはしてみるもんだて。」

「うん、全くだなあ……。なんでもな、太田川という駅から河和まで、七里余も線路を引いていくという大変な工事だ。その上、この辺は、低い田んぼへずうつと土を盛らにやあならねえ。だが、おかげでわしにも仕事ができたといいわけだかの。」

「みんなの話じゃあ、おまえは、山の砂とトロッコ稼かせぎの両もうけで、えらいことだそうなのう。」

「ばか言うな。そりゃあ、基光もとみつさは山が大きいから三百円にもなったが、力蔵りきぞうさやおれは、百円そこそこだ。そりゃあ、トロッコ引きの人工にんくはいい値だが、こんなえらい仕事じゃあ、割りに合わんわい。」

「そりゃあ、そうだ。なにしろ、この暑さの中での土いじりだのう……。」

今も、ちよつと現場を見てきたが、人夫たちが『アイゴー、アイゴー』とかけ声をかけ合つて、汗をポタポタ落として働いとつたが、ようあんなえらい仕事が続けられたもんだ。『あれは、かけ声なんかじゃあねえ。『つらい、つらい』と言つとるんだぜ。日中は熱いからと、大古根から夜の十二時ごろにやってきて、午前の十時まで働くんだが、何しろ、この暑い中で、ようやったもんだ。この辺の若いも



んじゃあ、一日も持たねえだろう。あれで日当が三円か四円じゃあ、気の毒なものだ。
……それでもよ、この間も、おれが目を回してへたばとつたら、『ニンニク食わんから

ダメねえ』と言って笑われちゃった。……だがよ、あんな臭えもん、食えるわけがねえ……」

当町の昔の交通

本街道と大野街道

江戸時代までの当町の幹線道路は、初め、阿久比川西方の丘裾を南北に通る本街道と、東西の大野街道、宮津の港を中継点とし、東浦海路へ結ぶ舟路があったが、下半田・乙川東南部の開拓により、堤防道路が加わり、現在の道路の原形ができた。

昔の交通方法

昔は、荷物運搬を含めて、すべて徒歩であったが、次第に馬の背で運ぶようにもなった。(牛は農耕用、明治になって運送用となる。)駕籠は江戸中期、荷車は明治中期に使用されるようになり、自転車の導入は明治後期である。

鉄道の開通

明治末、東浦に汽車、西浦に電車を通ったが、当地になく、人々は亀崎駅まで歩いていく不便さで、鉄道敷設の要望が強くなり、大正2年、横須

賀―半田間の敷設が計画されたが、折りからの経済不況で中止となってしまった。その後、当町の人々の長い運動がみよつて、昭和2年11月知多電気鉄道株式会社が設立され、昭和4年12月4日半田入海神社で起工式、同6年4月4日太田川―成岩間が開通、待望の電車が走った。

鉄道敷設工事

工事は名古屋の清水組の請負いで、線路用の土砂は、旧給食センターと都築紡東の砂山から採掘され、現植大駅のところから南北へ運ばれたという。労務者の飯場は、大古根にあり、工事の進行には、当時の英比土木課長が尽力した。

なお、当町植大の権現山から名作「ごんぎつね」を書いたといわれている岩滑出身の新美南吉には、十七歳の時、鉄道敷設工事労務者に取材した「アプシのくに」の作がある。(山の兄弟・町の兄弟、日本児童文学名作選、あかね書房刊)

第四十一話

サネモリ様

太平洋戦争以前のお話です。

草木に滝太郎さんというワラ細工の名人がおりました。滝太郎さんは、いつも8月に入ると忙しくなります。というのは、サネモリ様というワラ人形を作らなければならないからです。

8月の末ごろから9月の初めにかけて、ウシカという緑色の小さな虫が大発生して、穂直前の稲の茎や葉から養分を吸い取ってしまい、大被害を与えます。そこで草木の農家は「おんか送り」をして、ウシカを追い払わなければなりません。その時にサネモリ様のワラ人形が必要なのです。

なぜサネモリ様が登場するのか聞いて回りましたら、ある物知りの老人がこんなことを教えてくれました。

「それはのう、今から二百五十年ほども昔の享保17年の夏のことだったそうだが、京から西の方はえらいことイナゴが湧いて、稲がほとんど食われた。さあ、大騒動じゃ。村中、国中総出でつかまえて出ても、どんどん湧いてくる。お祈りしてみたが、少しも験がない。困り果てて、占ってもらうと、斉藤別当実盛様の御霊のたたりじゃという。

実盛様というのは平家の侍大将で、木曾義仲という源氏の大將が北陸路を攻め上つてきた時、敗走する平家の軍の中で、一人だけとどまり残って戦い続けたが、源氏の勇将手塚太郎に討たれてしまった。首実検の時、木曾殿が言われるには、わしは昔、命を助けてもらった恩義のあるお方だが、もう六十過ぎのはずだが髪が真っ黒なのはどうしたことかと

不思議がられた。それで髪を洗ってみたら、真つ白になったので、さすがは実盛殿だ、立派な身だしなみだが、さぞかしご無念であつたらうと涙を流して惜しんだという話だ。

そういうお方だから、きつと鎧兜で身を固めたようなかっこうのイナゴに姿を変えてた。たつてござらっしゃるに違いないと、村の衆は実盛様のワラ人形を作つてお供養をし、川へ流したら、イナゴがばたつと出なくなつてしもうた。それからというものは、イナゴばかりでなく、ウンカや稲の害虫を追い払うために、京から西ではサネモリ様を祀るようになったそうじゃが、草木もやることにしたのじゃ。なにしろここは知多第一の港の大野の領地だったこともある進んだ所だからのう。」

二、三人の大人に率いられた子供たちは、二メートル半ほどの竹竿の先に滝太郎さんが丹精こめて作ったサネモリ様をかつき、太鼓

や鉦を鳴らしながら芳池を出発します。

おんかの神様 出てござれ

サネモリ様が おさき立ち

ドーン ドーン

子供たちのよく透る声は、うねりを見せる稲の波の上を、残暑のむせかえる風と共に



渡っていきます。

大声ではやしなから草木各地の田を巡った「おんか送り」の行列は、地区の東端、四角形の柵池ますいけに到着すると、一斉にかけ声をかけてサネモリ様を投げ入れ、子供たちはお駄賃だちんのお菓子をたくさんもらって、家路へ急ぎました。

虫送り

昔、農薬のなかったころの病害虫の大発生を、われわれの祖先は、たたりと考え、部落全員でそれを祀まつってそのたたりを鎮めたり、あるいは村境や池川へ追い払って害をのがれようとしたりした。祀る方が虫供養に発展し、送る方は虫送り儀礼となったと考えられる。

本話でとり上げた虫送りは、昔ほどの部落でも行っていたものだが、農薬の普及で次第に姿を消し、わずかな地域で伝統芸能行事として残っている。(皮肉なことに、すばらしい農薬は人間や自然にも薬害を及ぼすことになったのだが……) 当町に戦前まで残っていたのは、サネモリ様を用いる草木地区と、タイマツや神符による板山地区だが、今は行われていない。

第四十二話

おもかる地蔵

椋岡、平泉寺へいせんじの本堂、尾張不動尊の横に頭巾をかむり、涎掛よだかひをかけて座布団の上にきちんと座った三十センチくらいの小さな「おもかる地蔵さん」があります。

平泉寺の和尚さんのお話によると、昭和20年太平洋戦争が終わってしばらくしたころ、お地蔵さんを背負った一人の女の人が、寺の前に立っていました。

「何かご用ですか？」

と聞くと、

「このお寺は知多の十六番ですか。あーよかったです……。」

と言いながら、背中から大事にお地蔵様を下

ろして、

「このお寺にお地藏様をあずかってください。」
と言うのでした。

和尚さんは、女の人を本堂に上げ、
「おあずかりいたしました。何かわけが
ありでしょうか？」

と尋ねると、その女の人は時々涙をぬぐい
ながら話をしたのです。

——私は三河の鈴木という者です。

私の主人は病気がちでしたが、二人の子供
を育てるため軍需工場へ働きに行きました。
毎日夜遅くまで残業しているうち、結核が進
行し咯血かっけつをしました。お医者さんから「これ
だけ衰弱しては助からないかもしれない
い。」と言われ、私は目の前が真っ暗にな
りました。貧乏で病院へ入院させる金もあ
りません。せめて栄養のあるものと思っ
ても、食べるものありません。いつその
こと親子四人心中して天国でやりな
おそうと思ひ、死

ぬ手立てを考えておりました。

その明るく日、看病に疲れついウトウト
した時、向こうの方から金色のお地藏
様にこやかな顔をしてこちらへ歩いて
みえるので、私は思わず「お助けくだ
さい」と叫びました。その自分の声でハ
ッとして眼を覚ますと、涙が流れてい
ました。その時、これはお地藏様にお
すがりせよという意味だと思ひ、子供
まで道連れにして死のうとした自分
が間違っていることに気がつきました。

翌朝暗いうちに起きて、なけなしの
金を持って岡崎の石屋さんに行きまし
た。大きな値段が高かったので、一番
小さいお地藏さんを買って家へお祀り
しました。

それからというものは、毎日朝晩、
お水と雑炊ぞうすいをあげて一心に拝
みました。

主人が倒れてから三年半、おかげ
で今は元氣になり、わずかばかりの
百姓をしています。家の中も明るく
幸せになってまいりました。

すると二、三日前、またお地藏様が私の夢枕に現れて「もうお前の家はだいたいじょうぶだ。



これからわしは多くの人を助けたいから、知多新四国の十六番へつれて行ってくれ」と言われたのです。私たち家族を救っていただい

たお方だから、いつまでも私の家にいてもいいのですが、おっしゃるとおりにいたしました。

私は知多半島ははじめてでございまして、どこに十六番があるのか知りませんが、この近くまで来たらお地藏様が急に軽くなられたので、何事だろう、もしやと思って、このお寺を訪ねたわけです。――

じつとこの話を聞いていた和尚さんは、「仏のお導きというものは必ずあるものです。あなたもこれから信仰を忘れないように。それでは大切におあずかりいたしましょう。」と言って祀られました。これが、この「おもかる地藏さん」なのです。

どうして「おもかる地藏」と言うのかというと、今も、人生に迷いを生じた人や、商売・進路などいろいろ判断に困った人が訪れ、手を合わせてじつと相談し、悩みを打ち明け、そのあとで、そつと抱き上げてから帰ってゆ

くからです。

さて、願いのかなつた人は再び訪れ、頭巾や座布団、涎掛などを寄進してゆくといわれます。

石への信仰



— おもかる地藏 —

日本人の祖先は、石に対する信仰心が強く、石を神体として祀つたり、石による占いをしてきた。

例えば、岐阜県大寧寺の「重軽様」と呼ばれる三十センチほどの石や、徳川家康が長篠出陣に用いた占石、静岡県沼津市の道祖神石などがそれである。

地藏菩薩は、無仏世界に衆生の苦を代わって受けてくれる仏として中世以降に信仰されたが、三途の川の賽の河原の連想から石像が盛んに製作されるようになり、道祖神と同じ扱いを受けたり、本話のような石占いに用いられ、「おもかる地藏」とか「抱き地藏」と呼ばれている。

なお、植大の神明社にあるメンヒル石も、石信仰の一つである。

第四十三話

鳥居が落ちた

昭和34年9月27日の朝早く、まだ北西の風が少し強かったのですが、抜けるような青空の下に、知多半島の各町は惨憺とした風景をさらしておりました。

ここ植大の五郷社の前を上にあがって北に折れた街道に数人の人たちが集まって話し合っていました。みな髪の毛を乱し、しかもたような皺深い顔で、隈のできた眼が赤く濁っておりました。なかには、まだ泥のついてある手足に血のにじむ包帯を巻いている人も見られます。

「のう、えらいことだったなあ。木も扉もほとんど倒れてしまつて……。見ろや、どの家

も屋根瓦の飛んでないところはねえぜ。」

「うん、ほんとだのう。……まさかこんな大きな台風がやってくるとは思わなんだ。28年の13号の時も大きかったが、今度のと比べる問題なららん。あれからしばらく大風が来なんだし、ラジオで大きいと聞いてはいたが、まさかここへやって来るとは思わなかったのう……。」

「わしんとこは、ちよつと内輪の祝いごとをやつとつての、みんな一ぱいきげんで、台風ぐらい、なんだと、言うもんだから……。晩方風が強うなつて、そこらじゅう放りっぱなしで行っちゃうし、飲んべえなど、這つて帰つていく始末で、あとがわやだ。雨戸を釘打ちするのが精いっぱいだった。」

「風が東から南への変わり時がいちばん強かった。停電で真つ暗なうえに、懐中電燈も電池が切れかかつとるし、大きなローソクはないし、金槌も釘も見つからんし……。雨戸

が弓のようになつて、初めはみんなで押さえとつたが、畳をあてがって、タンスや棒がかつといたが、雨が天井からボタボタ落ちるし、家はギーギー音を立てるし、床板が持ち上げられるし……。」

「ゴーツと風が鳴つて、瓦やいろんな物が雨戸にバタバタ当たつとつた。ああいう時は、ガラス戸はさっぱりあかんのう。おれは毛布を巻きつけて難儀して外へ出てみたが、柱にしがみついて見ていると、音はせんのだがイナビカリがピカピカ光る中を瓦が木の葉のようになつて舞つとつた。」

「おれの家は、表の戸が取れたら、裏の戸が全部飛んじやつて、中にある物が音を立てて動き出した。家中、壁のかけで、ふとんをかぶつて震えとつた。」

「あれは十一時ごろだったか、ぱたつと風がやんだんで、雨戸をこじあけて、木の枝やら板などの間を気をつけて出てみると、頭の上だ

け雲が切れて、星が光つとるのが見えた。ああ、これが台風の目というもんだなあと、何となくほっとしたもんだが、そのあとがいかなんだ。西からの吹き返りで、また命の縮まる思いだったぜ。」

「おれは今、ちよつと回ってきたが、だいぶ家が倒れとった。かたいだ家もあつたし、無傷なのは一軒もなかつた。これはえらいことだと思つて歩いていたら、自転車を押してくる人が、半田の東側がえらいことになつとるそうだ。源平橋げんへいから本町まで潮がおし寄せて、家はみんな流れてしまったらしい。この分だと、だいぶ死人が出とるぞと言つた。その話をみんなにしてきたら、半田に親類のある衆は、みんな顔色を変えて出ていったがのう。

田んぼは池のようになつとったから、どこか堤が切れとると違うか。なにしろ、道にも木の枝やら材木やらが散らばつて、歩くのに難儀した。古釘が出とるから、気をつけんと



あかんぜ。ゴム長やズック靴はあぶない。自転車もすぐパンクだ……。」

「おいおい、神明社隣の五郷社の鳥居かきぎの笠木が落ちとるぞ。」

そんなばかな、あんな重い石で、しっかりとめこんであるものが飛ばされるわけがない——そんなことをワイワイ言い合いながら行ってみると、なるほど、道路沿いの鳥居の柱は立っていましたが、笠木が中央から二つに分かれて、参道の石畳の上へ重なって落ちているではありませんか。どうも東のそばの椎しいの木が強い風で鳥居の笠木に触れたに違いありません。これはえらいことになった。きつと折れたに違いないと、恐る恐る近寄って見ると、なんとまあ、下の部分が少し欠けただけで異常がありません。それいしても、笠木を払い落としてしまう大風のものすごさに、人々は今さらながらびっくりもし、損傷のなかった不思議さを思うのでした。

伊勢湾台風



— 五郷社鳥居 —

各地に甚大な被害を与えた台風15号は伊勢湾台風と名づけられたが、昭和34年9月26日午後6時15

分潮岬しほさき西方15キロに上陸、伊勢湾を北上して、岐阜県西部—富山県から日本海へ抜けたが、半田消防署の観測では、中心気圧930ミリバール、瞬間最大風速58メートルに達した。そのため、半田・名古屋をはじめ、伊勢湾周辺の海岸部の各地に、多数の死傷者と損壊家屋を出した。

当町の被害も、死者8重傷4軽傷173にのぼり、住宅の全壊80半壊229で、阿久比川の決潰2か所延長383メートルで、農作物の損害も甚大だった。そのため、災害救助法が適用され、町議会も災害特別委員会を設け被災者の救済、復旧作業につとめ、全壊者には五坪の応急仮設住宅を支給した。全国からは、多数の救援金品ちやくが贈られた。



— 台風の被害 —